

# 串間より出土した玉璧は誰がいつどこで冊封され持ち込んだのか

平成31年度

くども児友園 園長 兒玉 邦彦

## はじめに

串間の穂佐ヶ原で発掘された玉璧は、大変貴重なもので国宝の指定を受けても不思議ではない。台湾の故宮博物院の玉璧担当の学芸員に見てもらったところ、神武天皇の墓を掘り当てたのではないかとの見解であった。もっとも、当人は日本の歴史に不案内であるがとの補足があった。串間に古代に大きな国があったとは思えない。水田がそれほど広く確保できそうにない。この玉璧には、それほどの価値があるということと理解すべきであろう。

現在は、旧前田藩の前田家のコレクションになっており、そのレプリカが西都の博物館に展示してある。

## 串間出土の玉璧

江戸末期の百姓佐吉が、串間の穂佐ヶ原で畑を耕しているときに、石棺を掘り当てその中から玉璧を取り出したと記録されている。地下式横穴墓の上を耕しているとき陥没し発見したものである。ベトナム北部から広州の広い範囲に南越国があり、その南越王に同等の玉璧を与えられているが、古代にそれほどの国が串間にあったとは思えない。志布志は肝属水系に水田が広がるが、広さは限定的である。古代の志布志・串間に南越国に匹敵する大きな国があって、冊封されたと考えるより持ち込んだと考えるべきだろう。また、貴重な骨董品として入手した物なら、死亡と同時に副葬することはなく末代に伝えるだろう。となると地下式横穴墓を持ち込んだ渡来人が玉璧も持ち込んだのではないかと考える。応神期の渡来人の多くは、朝鮮半島南西部出身と言われている。

## 冊封された王

冊封されて玉璧を貰ったのは誰だろうか。漢時代の朝鮮は箕氏朝鮮・衛氏朝鮮がある。衛氏朝鮮は漢によって滅びた。箕氏朝鮮は衛氏朝鮮に滅ぼされたのだが、そのあと馬韓をせめて馬韓の王になったという伝説がある。一方最初の冊封国として南越と衛氏朝鮮が挙げられている。衛氏朝鮮が滅びた後、漢による朝鮮の直接支配が続く。衛氏朝鮮が冊封によってもらった玉璧が渡来人によって串間に持ち込まれたと考えることはできないだろうか。衛氏朝鮮は、初代が満で二代目は名称不明、三代目が右渠（これも職名）である。右渠は漢に対して反抗的で、朝貢するどころか隣国が漢に朝貢するのを邪魔したりしていた。初代もしくは二代目が冊封を受け貰った玉璧が串間に伝わったとも考えられる。衛氏朝鮮が漢に滅ぼされる前に、衛の家老職の歴谿が三代目の右渠に漢に反発していたら滅ぼされるので、考え直してほしいとでも諫言したのだろうが、受け入れられなかったため、2万人ほどを引き連れて亡命したことが伝わっている。結果として衛氏朝鮮は漢にBC100年ころ滅ぼされ、漢の直轄地“郡”になっている。

『三国志魏書』馬韓伝に「魏略には、初期、右渠がまだ破れていない時、朝鮮の宰相である歴谿卿が右渠に諫言をしたが用いられず、東の辰国に亡命した。そのとき朝鮮の民も二千余戸が彼に従って出国した」と記してある。

衛氏朝鮮が冊封を受けたのは、紀元前 150 年頃だろうか。渡来人が大隅半島に渡来したのは、紀元 400 年くらいだろうか。百姓佐吉が発掘したのが 1800 年くらいとすれば、2150 年前に漢によって冊封されて授与された玉璧がその 550 年後に大隅半島に持ち込まれたことになり、その間保持され続けたことが奇跡のようにもある。

## 串間への由来

地下式横穴墓を東部南九州に持ち込んだ渡来人が、玉璧もまた持ち込んだと考えると理解しやすいが、年代を考えると奇跡的ですらある。また大事に保持し続けた玉璧を、ある時、副葬したのはいかなる事情があったのだろうか。衛氏朝鮮が漢からもらった玉璧が串間に来たとするならこんなことが想定される。諫言が容れられずに亡命した衛の家老職の歴谿が、持ち出し王統の証明として保持し続け、その末裔は朝鮮半島南西部に住み続けたのではなかろうか。この地は後には百済の地になるが、最後まで馬韓で 500 年代になって漸く百済となっている。ここから渡来人の多くは倭国に來ている。好太王の南下と百済の南下で朝鮮半島南西部の人たちは渡来人となったのである。400 年頃、応神天皇の時代が第一波の渡来であるが、当初は新羅の妨害により渡来できずにいた。そこで平群木菟宿禰と的戸田宿禰が率いる精銳が派遣され新羅国境に軍を展開した。ようやく北部九州を經由した渡来できたのである。南九州東部への渡来は、妨害を避けての早めの渡来ではないかと考えている。北部九州ではなく、五島列島を經由し、南九州を迂回し肝属平野や宮崎平野に渡来したものと思う。五島列島に隼人が居たという記録が風土記に残されている。

肥前国風土記にも、五島の海士は「容貌、隼人に似て、常に騎射を好み、その言語は俗人に異なれり」と記されている。

また一型アクセントが大隅半島から西諸県郡に残っているが、五島列島にも残っている。

主に宮崎県小林市～都城市～鹿児島県曾於市（旧財部町・末吉町）～志布志市（旧志布志町）にかけての南北に細長い地域（諸県弁）に分布する。この地域の一型アクセントは、文節の最後の拍が常に上がるというもので、**尾高一型（式）アクセント**とも呼ばれる<sup>[1]</sup>。また、五島列島最南端にも一型アクセントが分布している。

大隅半島の渡来人隼人は、朝鮮半島の移民団（難民）として新羅の妨害を避けて五島列島を經由し、稲作の行われている豊かな肝属や宮崎の豪族の私兵として雇用されたのではないかと考えている。

台風や梅雨など、気候風土の異なる地下式横穴墓の墓制を南九州にもたらしたのだろう。この点に関していえば、朝鮮半島南部も同様な気候風土である。地下式横穴墓は、中国では土洞墓といい漢の下級士族の墓制である。衛氏朝鮮によって山東半島を経て北朝鮮に伝わり、南西部朝鮮を経て南九州東部へ伝わったのだろう。私の予想が正しければ、5～600 年の間この墓制が維持されたことになる。驚くばかりである。南九州ばかりでなく関東へも伝わっている。

大隅渡来人によって、地下式横穴墓と合わせて玉璧がもたらされたものであろう。移民団のリーダー格の者が王統の証明としてそれを大切に保持し続けていたのだろう。いかなる理由があって、その玉璧を副葬したのだろうか。これらの時代は倭の五王の時代に同期するのだが、雄略天皇（倭王武）をもって南宋（中国）の冊封を受けるのをやめている。

渡来人は、大半は男性であっただろう。在地の女性と結婚し、子孫を設けた。渡来人の遺伝子は、約 25 年を半減期として薄められていっただろう。100 年も経つと 16 分の 1 となる。渡来人としての風貌や文化も徐々に薄められていき、在地系豪族に吸収されていったの

ではないだろうか。隼人という言葉は、700年頃から記録されているそうだが、AD400年頃は渡来人として明確であったものが、時の経過とともに不明瞭になり、いつの間にか九州南部の男性の呼称となっている。遺伝子が薄められ、拡散される過程で隼人と言う名称が使われたため、隼人の素性も不明瞭になったものと思う。

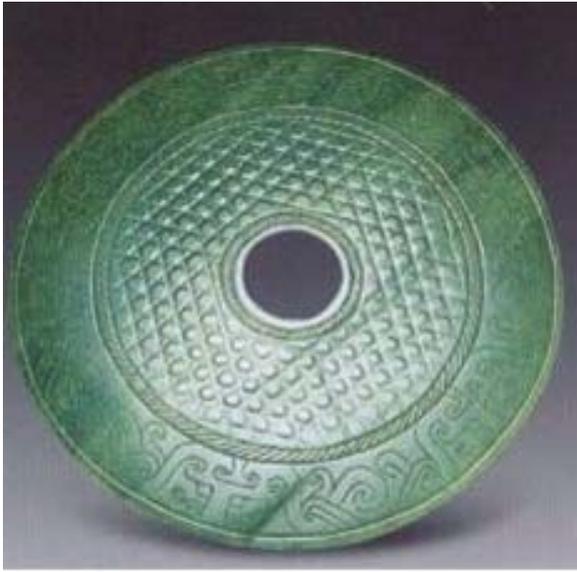
## おわりに

今から2100年ほど前の話で、明確な記録もない状態である。衛氏朝鮮が冊封され、もらった玉璧を歴谿が持ち出し、南西部朝鮮に伝わり、五島列島を經由し大隅半島に到達したものと考えている。インターネット上に、日本人の姓を検索するサイトがある。思い付きで“歴”という姓を検索したら、ごく少数だが有った。全国に10名弱、すべて長崎県である。長崎市と諫早市に合わせて10名弱と出た。残念ながら五島にはいなかった。いずれ歴さんを訪ねて、名前の由来を聞きたいものである。

穂佐ヶ原は、串間市から少し入り込んだところにあり、福島川が流れていた。川の両側は水田であるが、穂佐ヶ原という集落は小高い丘になっている。昔はこの部分が畑で、そこに地下式横穴墓を作り、吊ったのだろう。水田としては広くはない。串間市内には古墳もあり、稲作もできる。志布志の先の肝属川水系は、かなりの水田がある。古墳も大きいものがある。穂佐ヶ原に玉璧を副葬した渡来人は、肝属もしくは串間の豪族のもとで私兵として生活していたものだろうか。親を埋葬する場所として、多少入り込んだ閑静な穂佐ヶ原を選んだのではないだろうか。大切に保持し続けた玉璧を、王統を証明する必要がなくなり石棺の中に入れたのであろう。



串間出土の玉璧



広州、南越王漢墓出土玉璧  
直径25cm



玉璧が出土した穂佐ヶ原（具体的場所は不明）